第5章

インタビュー

銀座NAGANOで展示された「復幸りんご」(シナノスイーツ)、令和2年10月に収穫され、被災地を巡るスタンプラリーの記念品になった

interview

大災害を乗り越え 長沼の未来を考える 新組織が始動

復興対策企画委員会　副委員長　土屋勝さん

長沼地区復興対策企画委員会は、被災後に新設された組織です。長沼地区住民自治協議会を中心に、令和2年2月2日にスタートしています。

大きな被害を受けた長沼をどう取り戻すか。地区外への人の流出をどう防ぐか。長沼に戻ってもらうために何をするか。行政とどう話し合い、協働するか。つまり、長沼の未来を語り合うための会です。

とはいえ、前向きな意見が出るようになるまでには時間がかかりました。当初の話し合いでは、ごみや泥をどうする、家や畑はどうなるということばかり。被害があれほど大きかったのですから、それは当然です。わが家も大規模半壊でしたから、気持ちはわかります。

委員会では、まず堤防の強化を掲げました。

なぜ決壊したのか、なぜあの場所だったのか、に対する国交省の返答は「検討中、調査中」で、正式な回答を待っている状態です。

二度と決壊しない強固な堤防を作ってほしいという要望に対する初回の返答案は、とても納得できるものではありませんでした。その後、堤防を鎧のように固めるアーマー・レビー工法が提示され、一安心しましたが、更に安全性を高めるために鋼矢板を入れて強化してほしいと要望しています。

並行して、長野県には堤防道路の県道化を要望。現在は市道ですが、県道になると90cmのかさ上げが可能になるため、災害を機に対応してもらうことになりました。さらに国交省には、堤防のかさ上げを90cmから150cmにできないかと要望。氾濫しやすい立ヶ花（中野市）から村山橋までを自然のダム湖ととらえ、対岸も含めてかさ上げを、とお願いしています。

長沼の未来については、住民にアンケート調査を行いました。その結果を受けて、堤防に防災ステーション設置、復興道路の必要性、長沼小学校内に児童センターや保育園を複合的に建設、災害用公営住宅の建設、という4つのテーマを柱に動いています。

私は防災ステーションに関わっていますが、国交省、気象庁、長野市、地元などが連絡できるシステムを作り、上流の情報も防災ステーションに集約し、その情報をもとに住民が安全に避難できる防災の拠点にしたいと思っています。新たにできる場所ですから、防災とは別に、人が集まれる憩いや潤いの場所についても考えたい。ワークショップを開いて、住民の意見を聞いていきます。

いろいろな条件や縛りはありますが、長沼の未来のために、前向きに考え、取り組んでいきたいと思います。

令和2年2月2日の住民集会には約400人が参加。堤防の強化なしに日常の再建はないという意見が続出した

白馬の対応を見習い、要支援者をご近所で結ぶ

津野区　民生委員（当時）　笹井眞澄さん

民生委員だった私が、自分なりの避難ルールを考えたのは台風の2年前です。国が災害対策基本法を改正して要支援者の名簿作成を全国の市町村に義務付け、長野市では民生委員がそれを担当するようになったことがきっかけでした。

該当者に支援の確認・同意を得た上で、地域の役員に情報を提供する。そこで民生委員の仕事は終わるのですが、私は支援が必要な人と支援者を隣近所で結びつけることにしました。

その大きなきっかけは「白馬の奇跡」と呼ばれた神城断層地震（平成26年11月22日）の影響も大きかったですね。被災した地区では要支援者の情報を日頃から共有し、「隣のおばあさんが家のどこで寝ているかも知っているだよ」という住民同士の助け合いにより、夜中、家の下敷きになった人を救助し、犠牲者はいなかったと知り、とても感動しました。

そこで、運転手段を持たない人、足が悪い人、以前より判断力が落ちた人で、支援を希望した人に隣近所で、しかも仲の良い人との組み合わせを考え、「お隣の○○さんは支援を望んでいるので、こちらでぜひお願いしますね」と、お宅を訪問しました。支援者の体調や都合も変わりますから、1年ごとにペアの確認や見直しを行いました。
後日支援者へ、「避難勧告が発令されたら○○さんをよろしくお願いします。洪水時津野は5mの湖底になります。ですから浸水する前にご一緒に車で山へ避難し、指定避難所で救助物資を受け取ってください。その際持ち物は、薬、お薬手帳、保険証、現金、通帳、鍵、化粧品、PCとデータのUSBメモリーです」と避難のポイントをまとめたものと、市のハザードマップ、最新の避難所情報を一緒に配布しました。

令和元年10月12日の18時、副区長が「6時間後に避難勧告が出される」と駆け込んで来たので、すぐに電話連絡を始めました。一番に隣町の娘さんに「母親を迎えに来てね」、次にその方の支援者に「担当の○○さんは娘さんが迎えに来ますので、自分だけで避難して」、そして他の支援者にも要支援者を伴っての避難を促しました。また、自力で避難できる高齢者には「早く車で逃げて」と避難場所、持ち物を示しながら2時間かけて40軒へ電話をしました。

私自身は24時頃に避難し、12時間後には洪水の水も引き、10月13日の夕方一旦自宅に戻りました。床上185cmの浸水で、今家は修理中です。

全戸が全壊判定という大きな被害を受けた津野ですが、前日に親を迎えに来ていた家が2軒、私の電話より早く声を掛け合って避難していてくれた4組、ショートステイにいた人、偶然が重なり幸いにも犠牲者が出ませんでした。

お茶サロン、体操会でたまに確認し合っていたことも功を奏しました。今後ケアマネジャーさんとご家庭の協力が大切だと思いました。

73世帯のうち、戻ってこられるのは20世帯ぐらいかもしれません。規模が小さくなっても、大切なのはいざという時に声をかけ合い、助け合えるような関係性。隣近所で仲良く暮らすことだと思います。

interview

自主避難所の運営と独自の災害対策組織の発足

豊野区長　善財孝文さん

記録的なレベルの大雨に警戒を、という気象庁の会見を見て、区の役員は令和元年10月11日からため池の水位を下げるなどの対応を始めていました。

10月12日は朝7時から危険箇所の見回りを始め、豊野に避難勧告が出た18時に自主防災会を設置。千曲川の水位が異常な状況だとわかり、22時15分には自主防災会から各組長に連絡して避難を呼びかけました。穂保で越水が始まったのは13日の0時50分でした。

10月13日の朝、明るくなるのを待って5時過ぎから役員が区内を巡回。6時半頃に水位が急激に上がり、逃げ遅れた人の救助を消防団が始めましたが、指定避難所だった豊野西小学校はすでに人がいっぱいで、救助者を受け入れる避難先がないということでした。

そこで、朝7時過ぎから豊野北公民館（豊野区事務所）を仮の一時避難所として開設する準備を始めると、21世帯39人が避難して来ました。

ただの公民館ですから、避難所のような設備や物資はありません。停電もしていましたが初日は自家発電機もなく、カンテラ（携帯用灯油ランプ）一つで過ごしました。

21世帯39人が身を寄せた豊野北公民館（豊野区事務所）は急きょ設置された自主避難所

水が引くと災害ごみの片付けが始まって、10月14日からはその対応にも追われました。仮置場はできるのか、集積所はどうするか、運搬は業者に委託できるのか、分別はどうなるのか……。その混乱たるや大変なもので、苦情もすごかった。

災害ごみの問題に対応しつつ、自主避難所の運営は続きます。

自主避難所を長野市の指定避難場所にしてほしい、長野市の職員に常駐してほしいと要望しましたがそれは叶わず、区の役員2人が毎晩、宿直として交代で泊まりこむことになり、また指定避難所の豊野西小学校まで弁当や着替えなどの生活用品を取りに毎日、何度も通いました。

避難者は高齢者が多く、避難所の環境や衛生面も心配だったので、医師や看護師の要請もしました。豊野西小学校の医療スタッフが何度か来てくれましたが、本当は専属の医療ボランティアにいてほしかった。でも、ここは自主避難所だから、とそれも叶いませんでした。

災害救助NPOレスキューストックヤードが、段ボールベッドを設置してくれたのは10月17日でした。これはありがたかった。移動式トイレも設置してもらいましたし、最後は宿直も手伝ってもらって、本当に助けられました。宿直が続いたことで、体調を崩した役員もいましたから。

避難者は徐々に減っていき、自主避難所が終了

豊野区は1,800世帯のうち800世帯が被災。区外で仮設住宅暮らしをしている住民がどれだけ戻るのかという不安も大きい

したのは50日後の11月30日でした。

指定避難所に地域住民が全員避難することはできない、受け皿として限界があるとわかっています。自助・共助・公助と言いますが、災害の避難対応は公助が重要です。「自主避難所は法律が……」と型にはまったことを言わず、行政はもっと柔軟に支援してほしい。数日間であれば自主的な運営もなんとかなりますが、長くなると健康管理や衛生管理の問題もあって非常に難しい。指定避難場所であろうが自主避難所であろうが、人命を助けるためのものであることは同じです。「自主避難所」なんて冷たいことを言わず、どうすれば人命を守れるか、それを住民と一緒に考えてほしいと思います。

令和2年2月4日には豊野地区災害復興対策委員会が発足しました。

豊野町は今回の台風で917世帯が被災しましたが、うち800が豊野区でした。豊野町は7区に分かれているので、被災に対しての温度差や復興に対する真剣さには差があります。住民自治協議会全体で復興を考えることは難しいのではないかと判断して、会の発起を願い出ました。

私は、長野市が令和2年1月に立ち上げた災害復興計画検討委員会の豊野地区被災地域代表に住民自治協議会役員会で選出されました。長野市の復興計画策定にも携わることになりましたが、あくまでも被災地区の代表で、私個人の考えでは対応できません。地元の切実な要望を市に伝え、しっかりと復興計画に反映してもらうためにも、豊野地区災害復興対策委員会は必要だと考えました。特に千曲川の治水対策は重要ですから、長期にわたって治水・内水の対策を真剣に進めてもらい、それをしっかりチェックしていかないといけません。

復旧が終わったという人もいますが、そうは思えません。多くの被災者が家に戻っていませんし、市営住宅の取り壊しもこれからで、公共施設も復旧していない。そのため、地域コミュニティは崩れたままです。

仮設住宅の期限である2年後、令和3年10月に住民が戻って地域コミュニティは再開するのか、自治会が成り立つのか、まだ見えません。何を復興というのかわかりませんが、少なくとも元々あった生活や地域づくりは不可欠でしょう。

大事なのはこの経験をどう活かしていくかです。豊野は過去に何度も水害に見舞われているので、我々世代はある程度の対応を承知している。今回のことも、区の防災担当者が詳細に記録していますが、それらを後世に残すことも大切です。課題はたくさんありますが、長野市にお願いしたいことは、今回の災害を教訓に、災害対応について行政（支所含む）・消防・自治会が常に連携をとって情報の共有化を図ることが重要であると考えます。

「避難所運営の記録」「台風19号による水害への対応記録」
2冊の手作り冊子には時系列の記録とたくさんの写真が

interview

物資提供や縁側づくりで「限界」を「元快」に

住民自治協議会　女性部会　清水厚子さん

令和元年10月13日の朝8時頃豊野西小学校に避難しましたが、昼過ぎには水が引いて家に帰りました。床下浸水はしていたけれど、なんとか暮らすことはできました。

徒歩10分の次男の家は床上186㎝まで浸水していたので、翌日から片付けの手伝いに通いつつ、駐車場で勝手に炊き出しを始めました。うちから鍋釜を持ち出して、キャンプ用のテント、椅子、テーブルで「食べてかない？　温まっていってよ」と声をかけたり、おにぎりを持って近所の人を手伝ったり、友達が差し入れに来てくれたり。

次男一家は在宅避難していましたが、とにかく身の回りの物がみんなごみになってしまったので、うちからいろいろ持っていきました。同じように在宅避難している人はたくさんいて、みんな困っていたので、生活物資を分けてもらおうと思って避難所に行きました。でも、何回訪ねても「在宅避難の人の支援はできない」と言われるばかり。そんなはずはないと思ったし、本当にそんなはずはないと後でわかったけれど、管理していた人は避難所を守らなきゃいけない立場だし、最初は混乱もしていたんでしょうね。お弁当の配食が決まるまで、正式な配給はありませんでした。

どこにいても不便だし困ることは同じだろうと思って、住民自治協議会で「引き出物の鍋釜とか家にあるものを提供しようと思う」と言ったら、すぐさま「やりましょうよ」と言ってくれて、3日後には住民自治協議会の女性部会やボランティアが集まったチーム「集楽元快（しゅうらくげんかい）」が始動しました。そして、11月17日から、被災した「りんごの湯」の1階を会場にして、物資の無償提供を始めました。チーム名を「集楽元快」と名付けたのは、地域を限界集落にしたくない、元気になれる町にしたいと思ったからです。

とにかく始めてみたら、どんどん人が集まって、いろんな人が手伝いに来てくれました。避難所から来て手伝ってくれた人もいました。ビラも配ったし、初めて取材のお願いもしました。長野市民新聞さんに電話をして、「提供する物も欲しいし、ない人にはもらいに来てほしいから取材してください」って。そのおかげで、いただく物も、取りに来る人も格段に増えました。遠くから物資を送ってくれる人もいて、すごくありがたかった。物資の提供は12月25日まで続けました。

「集楽元快」の活動はゆるく続いています。「ねばならない」はひとつもない。出たいときに出て、自分が楽しいことをやるグループです。やりたくないことをやったって元気にならない。最近は切り干し大根や干し柿を作って、農産物直売所アグリながぬま（被災後、令和2年4月に全面改装し営業再開）で売って、コロナが落ち着いたら地域づくりイベントに使えるようにと資金稼ぎをしています。

「集楽元快」は、「まちの縁側ぬくぬく亭」にも携わっています。私は元々行政のケースワーカーで地域福祉とか家庭の人間関係を仕事にしていましたが、縦割りの機関だとどうしても部分的にしか関われず、もどかしい思いをしたこともたくさ

物資の無償提供は「りんごの湯」で。被災後にごみを搬出してガラ空きになっていた1階を掃除し、もらいもののブルーシートを敷いた

物資提供は令和元年12月25日で終了。クリスマスなのでサンタ帽で。「仲間のつながりや達成感で感動したことを覚えています」

んありました。でも、地域なら自由に動けて、申請書も相談記録票もいらない。お茶を飲みながら話を聞いて、その人が本当に困っていることは何なのか整理できるし、賛育会という介護や医療の専門家と協力して解決法を見つけ出せる。基本はただのおばちゃん、でも、必要だったら医療や制度につなげることもできる。非常にいいじゃん!と思ったんです。

運営の中心だった賛育会が職場に復帰すると主体は住民自治協議会に移っていきますが、「まちの縁側」だから、どこの事業になろうが、場所が変わろうが、いつでも誰でも自由に使える場所であることは変わらないと思っています。

令和2年12月から、「長野市生活支援・地域ささえあいセンター」のスタッフにもなりました。長野市社会福祉協議会が主体の組織で、被災者の生活相談やサロン運営関係支援先への手続等をしています。

ぬくぬく亭に顔を出しつつ、ささえあいセンターに行ったり、他のボラ仲間に声をかけられたらお手伝いをしたり。ほかにも、公費解体されてしまう庭の花を側溝に植える「花見ぞプロジェクト」やなんやら、いろいろやっています。

豊野は福祉の町と言われていて、ボランティアも盛んで、いろんなグループがあって、「ちょっと」と声をかければ「はいよ」と応えてくれる人がちゃんといる。一つのことを始めると、それがどんどんつながって、広がっていくネットワークがあって、その中で「自分にできること」というスタンスでみんなが来てくれる。

たまたま私が言い出しっぺになったこともあるけれど、リーダーというわけじゃありません。誰かが誰かに付いていくんじゃなくて、みんなでバーっとやっちゃう感じ。あちこちに「言い出しっぺ」がたくさんいるんです。

「支援の『支』は支配の『支』」とよく言っていますが、支援は支配につながりやすいので、気をつけています。土足では踏み込まないように、「世話焼きオバサン」として「世話焼いていい?」ってちゃんと確認してから、これからも世話焼きオバサンを続けます。「限界集落」じゃなくて、誰もがor皆が「元快」になるように。

ぬくぬく亭に通い、お茶を飲んでおしゃべりをして笑って、ときには泣いて…。それが気持ちの収束につながることも多い

「公費解体後は更地になって悲しい」から、溝に花を植えてお花見しよう、という「花見ぞプロジェクト」も「集楽元快」の活動

interview

「まさか」の被災経験から災害対策の見直しを開始

下駒沢区長　小林信重さん

台風19号による古里地区の住宅被害は181軒（床上浸水94、床下浸水87）でしたが、そのうち144軒（床上浸水76、床下浸水68）は下駒沢区でした。まさか千曲川が、まさかこんなところまで、と本当に驚きました。

令和元年10月12日の19時頃から役員や消防団員と下駒沢公民館に待機していましたが、雨が小降りになったので23時過ぎに解散。翌10月13日の朝5時半頃には県立総合リハビリテーションセンター前まで水がついていて、たしか膝ぐらいまでの高さがあったと思います。

下駒沢一帯が停電したのは朝6時半頃でした。6時45分には公民館に災害対策本部を設置しました。浸水を免れた地域は16時頃に解消しましたが、水がついた住宅の停電は16日の昼頃まで続きました。

自力で避難した方のほかにボートやヘリコプターで救出された方もいて、でもそういうことがわかるまでには時間がかかりました。避難所で安否確認をしようとしても個人情報が壁になって教えてもらえず、また親戚の家に避難した人などもいて、安否や被害の把握がなかなかできませんでした。

水が引いてからは、どんどん出る災害ごみに追われました。このあたりは軽トラックを持っているお宅が少ないので、とりあえず家の前に出してもらい、災害ごみ集積所までの運搬は軽トラを所有する役員やボランティアに依頼。集積所が豊野地区と遠く、かなり時間がかかって大変でしたが、長野県や長野市の社会福祉協議会が10月17日から27日までボランティアセンター下駒沢サテライトを開設し、組織立って動いてくれたので本当に助かりました。延べ500人のボランティアさんにも助けていただいて感謝しています。

今回の被災を機に災害対策を見直しました。まずは防災訓練です。役員が事前に準備するのをやめ、倉庫の防災用具を持ち出すところから始めてみると、他の行事に使う道具が邪魔をして防災用具がすぐに取り出せず、これはまずいということで、公民館の駐車場隣に防災用具専用の防災倉庫を設置しました。また、引き継ぎ書類やデータなどを安全に保管できるよう区の役員用書庫を公民館2階に設置しましたし、8つの常会ごとに行っている災害時の要支援者の確認や本人の意思確認も前倒しで行いました。

ただ、重要なのは、本当に救助ができるのかということです。もし常会長が被災して先頭に立てなくなった場合、別の常会が指揮をとれるのか。その場合、要支援者の個人情報はどうするのか。そもそも平日の昼間は若い人が少なく、高齢者ばかりで支援ができるのか。いろいろ課題はあり、自助、共助はなかなか難しいと感じますが、どうやって助け合っていくのか真剣に考えていかなければいけません。

道路に並んだ災害ごみの撤去は、ボランティアの協力に助けられた

interview

未曾有の被害と混乱を教訓に新たな組織の構築へ

中央地区・昭和区長　海野忠一さん

約1万7,000世帯の篠ノ井地区は7地区に分かれており、7地区内は2から17区に分かれて、計74区で構成されています。発災当時、私は中央地区の一つである昭和区の区長で、令和2年4月から篠ノ井地区全体の区長会長にもなっています。

振り返ってみると、記録的な降雨量が予測されるという報道を見てはいましたが、この地域では記憶に残るような災害は起きていないと油断していました。

雨が非常に強くなってからも、千曲川の土手に近い東横田・西横田地区の情報が流れる程度だったので、避難は考えていませんでした。

私が住む昭和区は、JR篠ノ井線の西、篠ノ井線としなの鉄道の間、しなの鉄道の東に3分断され、さらに区の真ん中を県道長野–信州新線の跨線橋が走っており、南北も分断されている地籍です。それぞれに地形も異なっています。

令和元年10月13日早朝、県道長野ー信州新線跨線橋で待機する自衛隊

令和元年10月12日の夜、住民から「こちらに水が来始めた」と連絡があり、初めて地区内の被害を知りました。

すぐに現場へ行くと、周辺が水に浸かりはじめ、地区の災害対策本部や避難所を設置するはずであった昭和区公民館はすでに床下浸水していて開けることもできませんでした。

地区の役員に招集をかけ、長野–信州新線の跨線橋の上を仮の対策本部としました。といっても、水が来ない高台の道路というだけで屋根があるわけでもなく、雨の中カッパを着て自分のスマートフォンで消防署や支所など関係機関に連絡を取るしかありませんでした。跨線橋に避難して来る人もいましたが、区内の多くは自宅2階に避難したようでした。ほかの区でも公民館が浸水してしまい、多くの住民が支所に避難しました。

長野市も篠ノ井支所も混乱していたので電話をしても状況把握はできず、ほかの区長も現場指示に出ていて連絡が取れない。自身が被災してしまい身動きが取れない区長もいました。区の組織である常会の役員に住民の避難状況や安否確認をしてもらおうにも、浸水していて出歩くことができない。とにかく早く明るくなってほしいと願っていました。

10月13日の早朝、事前情報もなく自衛隊が来て驚きました。隣接する川柳地区の特別養護老人ホームと介護老人保健施設が浸水したので入居者を救助してほしいと要請があったそうで、跨線橋に何台も車を停め、ボートで救出に向かいました。

浸水被害が大きかった御幣川地区の住宅街

篠ノ井交流センターで避難者を見舞う加藤市長

結局、入居者の多くは施設の2階以上に避難して、ボートで救出されたのは数人でした。施設の職員も招集されてどんどん車で来るのですが、先には進めず跨線橋の仮本部にやって来ます。車は篠ノ井支所か通明小学校の駐車場に置いて歩くしかないが、「たぶん腰まで水に浸かりますよ」という説明を、職員が来るたびに何度も繰り返しました。

施設の救助を終えた自衛隊に地域の巡回と住民の救出をお願いしましたが、地区外の住民のことはこちらでは把握できていないので、とにかく篠ノ井支所に避難してもらうよう手配するしかありませんでした。

最後まで篠ノ井支所との連絡はうまくできず、跨線橋の上に昭和区の仮本部があることも知られないまま。自衛隊が来ても指示をする職員はいない。その場にいる役員と相談しながら、ほとんどの判断は区長だった私が請け負うしかありません。立場的に指示はできませんから、お願いを繰り返していました。

明るくなり、水が引き始めてから近隣を見て回って状況を確認し、ようやく被害状況を理解。中央地区だけで床上・床下浸水は700世帯以上、篠ノ井地区全体で1,400世帯以上という大変なものでした。

それからの1週間は、ライフラインの確認、災害ごみの処理、運搬、ボランティアの説明や手配、一般住宅や市営・県営住宅の被災者対応、床下浸水した公民館の後片付け等に追われました。

非常事態になって混乱し、隣接する区長をはじめ篠ノ井支所や消防署との連絡がうまくできなかったことは今後の課題だと感じました。

地域や住民自治協議会を中心とした災害対策組織はすでにありますが、定期的に情報交換する場はありません。そこで、日頃から準備や心構えをするため、災害時の対応について定期的に協議、検討、情報交換をし、災害時には直ちに対応できる新たな組織の構築が必要ではないか、と7地区の区長会、長野市、住民自治協議会に提案しました。

内容的には、災害情報や避難情報等の入手・伝達方法の明確化、緊急避難場所の確保と明確化、避難誘導体制の明確化、避難場所での感染症対策等です。被災後には、なぜこうなったのかという原因の検証も必要でしょう。

仮称ですが、篠ノ井地区災害対策連絡協議会と名付けた新組織は、長野市の危機管理防災課、篠ノ井全地区区長会長からも賛同を得ました。篠ノ井支所を中心とした行政機関、篠ノ井消防署、長野南警察署、篠ノ井地区住民自治協議会、自主防災会、長野商工会議所篠ノ井支部、篠ノ井商店会連合会ほか関係団体、関係企業、関係区長をメンバーに、今後の対応を検討し、令和3年度内になんとか実現したいと考えています。篠ノ井地区は世帯が多く、地区ごとに地形も環境も違うので、一律なものではなく7地区ごとに作る方が良いのか、あるいは篠ノ井地区全体の根幹となるものを作って細部を各地区で作るのか。そのあたりから検討していきたいと思います。いつ、何が起こるかわかりませんから、早めの構築を目指したいと思います。

interview

被災を機に
福祉を中心にした
防災に取り組む

区長会長　町田修さん（現松代地区住民自治協議会会長）

我が家は松代城近くの殿町。かなりの被害があった地域ですが幸い自宅は無事でした。一晩支所で徹夜の後、令和元年10月13日の早朝5時頃から松代町内を見回りましたが、お城周辺は湖のようで、インターから松代大橋付近も水浸し。千曲川を越えることも須坂市方面や千曲市方面にも行くことができなくなっていました。本当に怖かったですね。

そのまま松代支所に戻り、まず災害ごみをなんとかしようと話し合いました。集積所が決まるまで連絡や調整に難航し、青垣公園に決まってからも激甚災害指定のためには分別が必要と言われて、進んでいかないもどかしさがありました。片付けが始まるとボランティアへの対応や、片付かないお宅への声かけ、事情の聞き取り、情報の収集、どう動き、どう要望に応えていくか、毎日必死でした。

避難では、長野県農業大学校や青垣公園に避難者が集中し、だいぶ混乱があったといいます。避難所だった松代小・中学校が浸水して使えなかったことも影響したのでしょう。自宅の2階に垂直避難した人も多く、防災無線や携帯電話が一晩中鳴りっぱなしでしんどかった、眠れなかった、という声をたくさん聞きました。

松代の住宅被害は553戸。大変な被害を受けましたが、これを機に危機意識や人とのつながりを大切にしようという意識が高まったように感じています。国の治水・防災対策はもちろん重要で、しっかり要望していくことが大事ですが、町としてまとまって行動できることが大事だと住民が感じ、「人と人のつながりを見直さなければいけない」「顔見知りの仲間なら、いざというときも声をかけやすい、隣近所で仲良くしないと」という声が出たのは心強かったです。住民自治協議会（住自協）に「防災担当」を新設しましたが、これからの住自協の取組は「福祉と防災」だと思います。

災害のことを早く忘れたいという人、水音を聞くと苦しくなるという人など大勢います。災害を直に見聞きしたら心に傷も残るでしょう。これからも皆で協力して心のケアは続けていきます。

新型コロナの流行で、復旧・復興関連のあらゆる活動が抑えられましたが、後片付けにある程度の目処がついた後だったことは幸いでした。もしコロナでボランティアが来てくれなかったら、まだここまでになっていなかったはずです。ボランティアの皆さんには本当に助けられました。今でも忘れられないのは、長沼で千曲川の堤防が切れ、その被害の大きさを知った松代の人たちが「ボランティアは向こうに行くだろうね」「こっちは家が残っているからまだいい。家を流されたほうに行ってやってくれや」と言っていたことです。それには泣けちゃいましたね。

松代城周辺はまるで湖のようだった。ポンプアップして水がはけたのは令和元年10月14日になってから

interview

この台風から得た反省や教訓を後世の災害に生かす

住民自治協議会　副会長　竹内守雄さん（若穂地区自主防災会連絡協議会会長）

若穂地区には38自治区ごとに自主防災会があり、それが集まって連絡協議会が構成されています。自主防災会連絡協議会では、毎年春と9月の防災の日に、消防団と消防署の協力のもと、防災訓練と研修会を行っています。

ここ数年、毎年台風の襲来が続いていたので、いつ災害が起きても対応できるように、各自主防災会ごとに連絡網を作るなど体制作りだけはしておいたつもりでした。しかし、実際に台風19号が来た時、想定どおりにはいかないことが多々ありました。

台風19号が上陸する前日の令和元年10月11日、綿内区長会は、妙徳山（標高1300m）の白髭大明神で、恒例の五穀豊穣と郷中の安寧をお願いする祈祷を行っていました。昼頃、山は天気がよく、ニュースによると、台風は太平洋側を通り過ぎて関東へ行くから危険はないなと楽観していました。

ところが、山を下り始めた3時頃から空が暗くなって、5時頃から強い雨が降り出し、大雨注意報が出されました。東信や北信の山沿いで大雨が降ると、若穂にも相当の影響があるだろうということで、万が一の時の対応について役員間で相談しました。

満水状態の千曲川

翌10月12日午前中に大雨・洪水警報が出されたのを機に、まず綿内・川田・保科の各区長と、地域の見回りと公民館を第一次避難所として開く準備をしました。若穂には、千曲川と犀川の合流点があるほか、一級河川の保科川と赤野田川などの急流が千曲川に注いでいて、過去にも何度か大きな災害を経験していたので、保科川や赤野田川、千曲川の堤防などを重点的に見回りすることも申し合わせました。

午後になって雨は更に激しくなり、土砂災害警戒情報及び千曲川氾濫警報が出た時点で災害対策本部を設置し、若穂支所と若穂中学校、保健センター、保科小学校の4箇所に避難所を開設しました。また、赤野田川が越水寸前となったため、牛島方面で浸水被害が出ると判断し、第二機場のポンプを回して赤野田川の水を保科川に流すことを協議し実施しました。

夜8時頃、私は千曲川堤防上を車で巡回しました。千曲川と犀川の合流地点はあと1mで堤防の天端に達するところまで増水していました。多くの人が堤防上で心配そうに見ていましたが、危険なので退散するよう声をかけました。

千曲川がこんなに増水したのを見たのは、幼い頃に一度見て以来。千曲川の堤防ができてから約100年、その間に何度も増水や洪水を経験して、堤防には相当圧力がかかってもろくなっているは

保科では県道長野菅平線が土砂崩落で不通になり、復旧工事は今も続いている

耕作者だけでなく、多くの住民と消防団が河川敷の災害ごみの片付けに参加した

ずです。そのため、すでに漏水することが度々あったので、今回は越水もあるぞと覚悟しました。が、幸いなことに、10月13日午前1時頃に雨足が弱まり、越水を免れることができました。

その一方で、牛島では赤野田川が内水氾濫を起こし、道路や農地が冠水する被害が出ました。山間地の保科では、10月12日夕方から夜にかけて土砂災害が発生し、川や橋や護岸が決壊して一部集落が孤立したり、高岡では断水が発生、公民館や家屋が浸水する等大きな被害が出ました。それでも死傷者が出なかったことは、不幸中の幸いでした。

台風が去ると、10月13日朝から役員で被害状況の把握や復旧に向けた活動に取りかかりました。

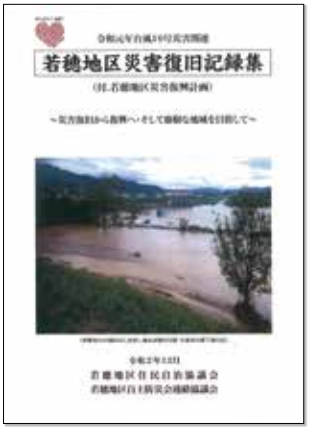
まずは、千曲川河川敷、保科川、赤野田川の護岸や橋、道路の視察や迅速な復旧を関係機関に働きかけることにしました。特に千曲川堤防については、完成堤防化を急ぐよう千曲川河川事務所に数次にわたって要望しました。10月には直接国土交通省に陳情しました。またこの台風で千曲川河川敷50haは完全に洪水被害に見舞われ、11月初旬から若穂地区住民400人で河川敷の災害ごみ（180t）の片付けを行い、その後堆積土砂（約2万t＝トラック1万台）の搬出を市に申請した結果、長野市内で一番最初に農地の復旧を成し遂げ、現在は土地の集積により法人等による新たな営農復興も始まりました。

しかし、反省点もあり、10月13日午前2時頃発令された避難勧告の時のことです。高齢者については、民生児童委員と区の役員が事前に要支援者を把握してあり、家族や親せき、隣組伍長が避難させるはずでしたが、要支援者との連絡や避難誘導もよくできていない状況も見られました。

これを教訓として、誰が避難の手伝いをするか要支援者を助ける仕組みを全区に行き渡らせました。また、災害時の情報網や防災体制の整備、区長等に緊急連絡ができる携帯アプリの導入・一時避難所の設置等も行いました。

こうした反省や要望等を今後の防災に活かすために、災害記録集を編集し発刊しました。この災害を通じて、防災対策の中で何ができて、何ができていないかがわかりました。住民の皆さんが同じ地域に住んでいるとはいえ、場所が変われば、どこにどういう災害があったか知らずにいるケースも少なくありません。そして何よりも隣同士の日頃のお付き合いが大事であります。

自主防災会では、地区ごとに様々に抱える実態や意見、要望、反省等を集約し発信することで、みんなで情報を共有し、今回の災害を機に、次なる世代に教訓を引き継ぎ、防災意識を高め将来の災害に備えていければと思っています。



若穂地区災害復旧記録集
（令和3年1月発行）

interview

新幹線10編成が水没し 車両センターも壊滅 完全復旧への取組は続く

長野新幹線車両センター　所長　滝沢和浩さん

清掃や検査、確認作業など翌日の準備を終えて間もない令和元年10月13日の深夜0時45分頃に避難指示が出て、関連会社の社員を含む36名がセンター内の事務所等に避難しました。朝4時半頃に停電、その後、水位はみるみる上がり、自衛隊のボートで救出されたのは23時を過ぎました。

水が引いて構内に入れたのは10月15日になってからです。着発線の7編成と庫内の3編成、計10編成が浸水し、着発線の2編成についてはほぼ全軸脱線。本当に驚きましたし、なにより切なかった。結局、被災車両は全て廃車することとなり、センターの設備も壊滅的で検査業務はできなくなりました。やむなく多くの社員に仙台、新潟、東京などに異動してもらい、残った社員は大量の泥の片付けや清掃、廃車解体作業に追われる日々でした。

当初、復旧まで2〜3年かかるのではないかという予測もありましたが、グループの総力を挙げて復旧に力を注いだ結果、災害から12日後の10月25日には本線の使用を再開し新幹線を金沢まで通すことができ、令和2年3月には着発線2本、7月には4本が復旧、12月には検査業務の再開に漕ぎつけられ、本来の車両メンテナンスができる状態となりました。まだ、完全復旧とはいかず、令和3年度末を目指して動いている最中ですが、本来の業務が再開できたことは大きな喜びです。

今回のことで励ましの手紙もたくさんいただきました。「大好きな新幹線が泥水につかって悲しかったです」という5歳の男の子。「子どもがE7系のファンです」とお子さんの絵を同封してくれたお母さん。「修学旅行に行けたのはJRのおかげです」と復旧を喜んでくれた小学生たち。改めて新幹線が愛されているのだと感じ、それはもう感動しました。もちろんお礼の手紙を送りましたよ。

この経験を教訓に、ハード面の防災対策を検討しつつ、ソフト面では新幹線の避難について対策をしています。10編成を避難させる場合、乗務員の確保、ダイヤの入替え、避難先決定の調整等々に7時間程度は必要です。自治体などの避難情報が出てからでは間に合わないため、降雨量や河川の水量等トータルで判断してアラートを鳴らす独自の車両疎開判断システムを作りました。たとえ空振りになっても、新幹線の避難準備をし、重要機器等も安全な場所へ搬送する。二度と同じことが起きないよう、早い段階からできるだけのことをしていきます。

検査業務再開まではつらかったと思いますが社員たちは異動先でたくさんの勉強をし、さらにパワーアップしてくれましたから、より安全・安心で快適にお過ごしいただける新幹線を提供できると思います。

若手の立案で、大きな被害を受けた地元・赤沼を応援するために特産のりんごを上野駅構内でお客様に配布するイベントも開催した
(写真提供:交通新聞クリエイト株式会社)

interview

工業団地の中で被災した企業同士がともに復旧を目指す

代表取締役社長　春日孝之さん

当社は、フッ素樹脂製品をはじめ、自動車補修部品の開発や製造、射出成形機の組立を行っています。台風19号災害では、穂保の北部工業団地にある本社・工場が浸水し、製造設備が大きな被害を受けました。

台風19号が本州を直撃した令和元年10月12日、夜9時頃に篠ノ井に住む役員から「避難する」という連絡が来ました。その一報をもって、社内に緊急対策本部を立ち上げ、部長職以上の幹部社員でLINE（ライン）のグループを作って情報を共有することにしました。その夜は緊急アラームがたびたび鳴り響き、とても寝られる状況ではありませんでしたが、代々伝わる経営者の教えに従って、「緊急時ほど冷静になれるよう、休める時に身体を休める」ことにしました。

日付が変わって10月13日午前4時に、トヨタのカスタマーセンターから本社ガレージの車に異常事態が発生したという電話が入り、穂保の工場と本社が浸水したと認識しました。役員が様子を見に行ったものの、浸水により社屋にたどり着けず、水が引くまで待機することにしました。

被災直後の工場内部

10月14日、ようやく工場に入ってみると、1階は全て水没し、在庫していた商品の多くが不良資産となりました。製造設備の工作機械、プレス機、焼成炉も使えなくなり、建設中の工場も浸水して設置間もない機械3台も水没。非常にショックを受けました。

救いだったのは、平成30年新設の素材工場が洪水大国・タイの拠点工場を設計した時にならって、プレス機の油圧ポンプユニット等の重要設備を高さ1.5mほどのステージに乗せてあったことです。そのおかげで先頭工程の大事な心臓部だけは被害を免れることができました。

当社には、平成27年に作成したBCP（事業継続計画）があり、非常時にいかに最短の復旧を目指すかを明らかにしてありました。しかし、これは地震や火災、大雪等を想定したもので、今回のような水災についての盛り込み方は非常に浅いものでした。そのため、この台風被害を教訓として計画を見直し、会社にとって致命的になる重要書類やデータは1階に置かない等のルールを新たに加えることにしました。

復旧工事は、優先順位をつけて、4段階に分けて行いました。

復旧初期段階は、平成30年に作った素材工場と建設途中だった加工工場の復旧を最優先に取り組みました。これらは今後の成長が見込まれる半導体産業向けの主力工場であり、競合性も高い市場であることから、長期の離脱が許されない状況

水が引いた後と復旧後の工場外観

にありました。また、最新鋭の設備を備えており、生産能力の回復を最も効率的にできる見込みがあったからです。

第2段階は独自性の高い製品用の設備を確実に復旧した期間です。ご了承いただけるお客様には納品を待っていただき回復の時を待ちました。この間、タイに長野工場の機能を一部移管したり、滋賀工場では長野の社員を派遣して、夜間に滋賀の設備を使って仕事をしてもらうなどして、長野の社員の雇用維持にも努めました。

第3段階は、新しいイノベーションを盛り込むことによる創成の時期です。単純復旧では取り戻せない受注をイノベーション投資によって取り戻し、以前にも増して高い競争力を備えることを目指します。そして第4段階では、整備が完了した設備を最大限活かして、受注獲得活動を積極的に行っていく予定です。

私は、できるだけ早く長野工場を復旧させるというよりも、グループ全体の復旧と将来の競争力を重視したので、生産能力の回復においても、中古機械を使うなどの選択肢を取らず、あくまでも次世代対応機の修理と最新機種への入れ替えにこだわりました。そうでなければ復旧は半年ほど早かったかもしれません。だからこそ完全復旧した後は、技術革新を行って生産性を上げ、新分野にも進出して、従来の競争力を上回る成長を成し遂げていきたいと思っています。

復旧には20億円近くかかりましたが、グループ補助金を使って3/4が国から補助されることになりました。グループ補助金とは、被災地域でグループを構成して復旧を目指した場合、そのグループに対して非常に手厚い補助が出る制度です。工場があった北部工業団地全体が被災したので、ここの三十数社を取りまとめて、私たちが幹事企業となってグループ補助金を申請しました。

この補助金を活用するには、グループ内で復旧事業計画を立てて、復旧に取り組む必要があります。お互いの事例紹介をしたり、マニュアルを作るための勉強会を開いたりする中で、非常に早く復旧を遂げた企業もあり、様々な復旧計画や経営戦略を知ることができて大変勉強になりました。

被災前から北部工業団地自治会という組織があったのですが、BCP提携においてはほとんど機能していませんでした。ところが、同じように被害を受けた者同士、いろんな情報を共有していくうちに、団地内のコミュニケーションは格段に活発になっていきました。特に、当社にはグループ補助金申請室が設けられているので、様々な企業の経営者や実務者の皆さんがやってきて、交流が持てたことは大きな収穫でした。これからも、今回の災害の教訓を地域で共有し、地域全体でBCP強化と力強い復興を目指していきたいと思います。

心臓部を高い位置に置いたプレス機

interview

絶望から希望へ。泥に埋もれたりんご畑が1年ぶりに迎えた実りの秋

組合長　徳永慎吾さん

後継者がいなくなって遊休農地が増えれば、長沼というりんご産地全体が衰退してしまう。それをなんとか食い止めよう、と長沼の30、40代のりんご農家10人で2010年に「ぽんど童」を設立しました。

各自の畑とは別に、ぽんど童として長沼地区内の赤沼に3haの畑を借り、スリムレッド、夏あかり、秋映などの早生品種を栽培しています。

でも、今回の台風で、ぽんど童の畑は土砂やごみに埋まり、メンバーのほとんどが家も畑も被災しました。うちも床上浸水してリフォーム中ですし、まだアパートで仮住まいの仲間もいます。被災当初はとにかくめちゃくちゃになった家の片付けが最優先で、畑をどうしようかと考えられるようになったのは令和元年11月に入ってからでした。その頃から農業ボランティアが来てくれるようになり、りんごの木の根の周りの泥出しを一生懸命やってくれました。

それまでは、「泥出しなんて無理でしょ、これじゃ畑は続けられない、お先真っ暗」という感じだったけれど、作業が進むにつれて少しだけ希望が見えてきた。すごい人数が来てくれて助かりました。

ただ、根の周りの泥を出して木が復活しても、ほ場全体の泥やごみを出さないと農機具が入れられず、作業ができません。令和2年3月下旬から4月上旬に1回目の防除作業をすることがすごく重要で、それができないと病気が蔓延してしまいます。最初の消毒に間に合うように、すごい量の泥をどう除去してどこにどう捨てるのか。なんとかしてほしいとみんな言っていましたが問題は山積みで、ようやく農林水産省、長野県、長野市が動いて業者に委託し、圃場の泥を撤去する作業が始まったのが令和元年12月の終わり頃。撤去が進んだ翌年2月頃には、なんとかなるかもしれない、と思えるようになりました。

間に合わなければ木を切るしかない、と水面下では最悪の状況も想定していろいろ動いていましたが、どうにか1回目の防除作業に間に合いました。といっても、更地になった畑もたくさんあって100%戻ったわけじゃありません。被災した年はりんごを出荷できず収益面でも大変でしたし、資金面の問題はこれからものしかかってくると思います。

でも、畑が片付いてからはひたすら農作業に没頭しました。それぞれに複雑な思いはあったはずですが、りんごをつくるしかない、そのために大勢が動いてくれたんだ、それに応えるには続けるしかない、とみんな考えていたと思います。

1年経った令和2年は無事にりんごが収穫できました。泥の影響も思ったほどなく、出荷に大忙しでした。

早生のりんごが収穫できたとSNSに投稿すると、何度も農業ボランティアに来てくれたスーパー勤務の方からすぐに連絡がきました。長沼でりんごができるようになったら販売したいと思っていたそうで、令和2年10月初旬に秋映を20箱購入していただき、「被災地支援ということで広告

「ぽんど（pond）」は「沼」。「童」は「子ども」。若手がりんごを守り長沼を育てていけるよう命名。産地を守ることが目的の組合は珍しい

りんごの木が土砂に埋もれた。「撤去された泥の量は軽トラ80万台分と聞きました」

を出したら、3時間で売れました」って。1年経って被災地のことなんて忘れられているのかと思っていましたが、支援したいという人がたくさんいた。それを知ったときはうれしかった。

その後、ふじりんごを売ってもらいましたが、それもすぐに完売。最初は支援でも、「食べてみたらおいしかったから、また買った」というのがうれしかったし、これなら続けていけるなと思えた。

ボランティアに来てくれた方の数はわかりませんが、とにかくすごい人数。泥やごみを片付けてもらえたことはもちろん感謝していますが、我々のやる気を奮い立たせてくれたことがすごく大きかった。「もうりんご無理」と思った時もあったけれど、「これだけの人が協力してくれるんだからやろう」って思えましたから。

被災前のぽんど童は、りんご畑を守る活動だけでした。でも、被災地の復興支援をしている千曲川広域サテライトなどに協力してもらいながらりんご畑の写真や摘果など作業のことを発信してみると、気にかけてくれる人がいるとわかりましたし、発信することの手応えも感じました。

一方で、被災当時のイメージのまま、もう長沼のりんごはダメだろうと誤解している方もいるようです。だから、発信が上手な人たちの手を借りて、外に伝えることも続けていこうと思っています。

ボランティアをきっかけに、ずっとかかわってくださる方々とは、「りんごの花見をしたり、一緒に農作業をしたり収穫をしたりできるといいね」と言っていたのですが、コロナ禍でそういったイベントはできませんでした。でも、いつか実現したいですね。

今回、応援したいという思いで赤沼のりんごを買っていただいた方々には、これを機会においしさを知っていただき、これからは「おいしいから」買っていただけるようにしたい。支援していただいた皆さんに、そう思ってもらえるおいしいりんごを提供していきたい。食べてもらえばわかる、という自負を持って、これからもずっとりんごをつくり続けていきます。

ボランティアを機に初めて長沼のりんごを食べたという人も。「おいしかった」の言葉に「まだまだがんばれる」と励まされた

interview

ボランティアセンター運営、農ボラ、農福連携…ボランティアの力と協働の取組

総務企画部企画グループ主任　山﨑博之さん

令和元年東日本台風では、千曲川流域を中心に広範囲にわたり被害が発生したため、長野県社会福祉協議会（県社協）では各地の市町村社協を支援しながら11の災害ボランティアセンターの立ち上げに奔走しました。

私は長野市社協の支援として、長野市北部災害ボランティアセンターの運営を担当しました。まず令和元年10月14日に長野市ふれあい福祉センターに災害ボランティアセンター本部が立ち上がり、被災者からの相談の受付が始まりました。一方、ボランティアの受入は、被害状況や過去の被災地支援を参考に、11月末までに5万人規模のボランティアが必要と見積もり、週末2,000人、平日1,000人を受け入れられる体制を整えていくことを想定。被災地域に近いエリアで南部と北部のセンターを立ち上げることになり、まずは南部センターが10月16日に南長野運動公園に設置されました。

一方、千曲川の堤防が決壊した北部地域は、被害が甚大で現地近くにセンターを設置することが困難な状況であったため、10月18日に隣接する地区の柳原総合市民センターに北部センターが設置されました。また、被災した地域と相談をしながら活動現場のすぐ近くにサテライト（大町、高台、赤沼南、赤沼北、豊野、下駒沢）がセンター開設と同時に設置され、ボランティアの集合や休憩場所、資機材の配置のほか、住民が直接相談できる場としても機能しました。その後、重機による支援を行うNPOにより土砂やがれきを撤去してもらい、堤防決壊付近の穂保の特別養護老人ホームりんごの郷にりんごサテライトを、長沼支所隣の交流センターに津野サテライトを設置し、被災から2週間を経て支援体制の拠点が整いました。

山崎さんは、日々入れ替わるスタッフに対して、毎朝のミーティングでセンターの目標を伝え続けた

11月2日から4日の3連休には8,000人を超すボランティアが駆け付けて、地域に多数出された災害廃棄物の山を片付ける「ONE NAGANOプロジェクト」も行われました。特に、中日の11月3日は市町村単独の災害ボランティアセンターでは過去最多となる3,578人のボランティアが活動しました。運営側では、大型バス22台、マイクロバス20台にて対応するなど、とにかくマンパワーを最大限活かした復旧活動が行われました。このことは、それまで地域を埋め尽くしていた大量の災害廃棄物がみるみる減り、住民の皆さんが抱えていた不安や絶望、そして復旧が中々進まずに怒りに包まれていた被災地域の雰囲気の中に、ボランティアへの感謝や希望が生まれました。1日の活動を終えたボランティアが道路中を埋め尽くし

長野市だけで6万5,000人、長野県内の農ボラを含め約8万人のボランティアと400の各種団体が被災地を支えた

官民が協働して災害廃棄物を片付けるONE NAGANOのキャッチフレーズが長野の災害復興の枠組みとなった

歩いて帰る光景に、被災地域の景色とともに空気が変わった瞬間として肌に感じました。

たくさんのボランティアを受け入れるためには十分なコーディネート機能も必要です。長野県内外の社協職員のほか、日頃から連携する県域の災害時支援ネットワーク（NPO、社協、生協、連合、JC、シニア、共同募金等で構成）のメンバー、災害支援で駆けつけたNPOと連携して北部センターや各地のサテライトの運営を行いました。

地域に出された災害廃棄物が片付いてくると、家屋や敷地内に流入した土砂の撤去が本格化しました。また、りんごを中心とした畑の支援を求める声が高まってきたのもその頃でした。しかし、農地の支援は生業支援に結びつく面もあるため、災害ボランティアセンターとは別の枠組みを構築する必要がありました。そこで、JA（農業協同組合）が中心となり長野県災害時支援ネットワークが運営をサポートする形で「信州農業再生復興ボランティアプロジェクト（農ボラ）」が立ち上がりました。農ボラでは、泥に埋もれていたりんごの木の根回り半径1～2mの泥をボランティアの手作業で掘り出して根が呼吸をできるようにし、その後、行政から委託を受けた業者が重機にて畑全体の泥を排出していきました。さらに、この動きは障害者就労支援事業所の参画につながり、農地に多数流れ着いた漂着物の片付けを市から受託する災害復旧業務における福祉的短期就労として「農福片付けプロジェクト（農福連携）」へと発展しました。また、このように復旧期に地元農家と連携できたことは、その後の復興活動やまちづくりの再興に向けた協働の取組へとつながるきっかけにもなりました。

北部センターは二つの大きな目標を掲げて運営してきました。一つ目は「コミュニティの再生」です。ボランティア活動は災害廃棄物の運搬や泥の撤去、家屋内清掃等がありますが、こうした作業自体が目的なのではなく、この作業を通じて住民の皆さんがもう一度この地に戻る選択肢を広げられるかが目標であり、そのためには住民の皆さんとの対話を大切にしてほしいこと。そして、二つ目は「おもてなしセンター」として、スタッフがとにかくさわやかに対応し、また来たいと思ってもらえるようなセンターの運営をしてボランティアの満足度を高めていくことです。

11月末には、県内の社協職員を更に集結させ、支援の漏れやムラがないかを把握するため、一軒一軒訪問して復旧作業の進捗確認と合わせて生活課題の把握に努めました。こうして得られた情報は、長野市から委託を受けた市社協が12月に開設した長野市生活支援・地域ささえあいセンターへと引き継がれ、復興期に継続して行う被災者の見守りや相談支援の事業につながっています。また、県社協では令和2年4月に千曲川広域支援サテライトを被災地域に設置し、多様な団体と連携した復興期の支援活動や、農ボラ・農福連携、そして被災を経験したからこその防災学習や交流促進を広域で推進してきました。こうしたボランティアが起点となり、多様な団体が連携・協働する取組を今後も展開していきたいです。

interview

怒涛（どとう）のボランティア対応を活かし、より良い支援を

事務局長兼総務課長　庭山透さん

長野市社会福祉協議会（市社協）は、令和元年10月13日に長野市からの要請を受け、10月14日に長野市災害ボランティアセンターの本部を開設しました。マニュアルに基づき市社協が入っているふれあい福祉センターに設置したものの、災害の規模が大きすぎて対応しきれないことは明らかでした。ボランティア用の駐車場や受付場所を確保しようにも、被災地は長野市の南と北と離れていて、特に北部は広く浸水しているため現地に入るのは難しい。ということで、とにかく開設し、ニーズ受付専用の電話回線を確保しましたが、当初は被災者に知らせる術がなく、どんどんかかってきたのはニュースを見た方々の「ボランティアに行きたい」という電話でした。

南部の被災地の水の引きが早いということで、まずは10月15日に松代と篠ノ井の支所にサテライトを開いて職員を派遣し、ボランティアの受入れ準備を始めました。

長野市や指定管理者の協力により南長野運動公園が借りられることになり、長野市南部災害ボランティアセンターを設置したのは10月16日。受付を開始すると、16日は230人、17日は605人、18日は575人、19日は954人と希望者がどんどん南部センターに集まりました。

発災から時間が経ち、被災者の課題やニーズも変化する。人が減った地域ではコミュニティの崩壊という課題も。長野市生活支援・地域ささえあいセンターが対応していく

でも、準備なしで現地に行ってもらうわけにはいきません。被災者の要望を把握し、そのニーズに応えられるボランティアをグループにまとめ、リーダーを配し、現地における様々な指示をする、というマッチングと準備が必要ですが、当初は相当な混乱状態でスムーズにはいきませんでした。

一方の長野市北部災害ボランティアセンターは、10月18日に柳原総合市民センターに設置。続いて各サテライトも設置されました。駐車場は自衛隊等が使用していたため、南部センターをボランティアの駐車場にし、大型バスで北部センターまたは各サテライトへ送迎することになりました。ただ、浸水被害がかなり広範で、道路には災害廃棄物があふれ、長沼地区内の道路は寸断され、国道18号は渋滞するなど、ボランティアの輸送が容易ではなく、高速道路で中野市まで行ってから長野市北部に戻るなどの手段を講じました。

被災後初の週末は、南部・北部合わせて10月19日に1,392人、20日に3,079人のボランティアが集まって受付がパンク。やむなく途中で中止し、200人くらいにお帰りいただくことになってしまいました。受付に時間がかかったという批判はそのとおりで、本当に申し訳なかったというしかありません。

予想以上の人数が集結し、ボランティアの長い行列ができた

ボランティアを送り出した後のボランティアセンター受付

順次、駐車場の確保が進み、長野市をはじめ各市町村のマイクロバスも輸送に組み込みながらなんとかバスをチャーターし、ボランティア輸送のルートが確保できると、順調に回るようになりました。

市社協は災害の経験がほぼなかったので、全国社会福祉協議会の支援チーム、長野県社会福祉協議会や県内外の応援社会福祉協議会の協力を得ながら、毎日のミーティングで情報を共有して徐々に慣れていきました。経験豊富なNPOやボランティアからのアドバイスもたいへん参考になりました。

通常のSNSとは別に災害専用のFacebook（フェイスブック）ページを作り、受付時間、ボランティアの人数、活動内容、翌日の予定、欲しい物資のお願いなどを発信しましたが、これはかなり有効だったと思います。

その後、12月22日までは毎日活動し、令和2年1月からはボランティアは登録制になりました。ニーズがあればそれを伝え、都合の合う方に活動していただくかたちになっています。

今回のことで、マニュアルの改訂が必要だとわかりました。受付はどこに、どのようにし、被災者とボランティアをどうマッチングするか、は決まっていましたが、人の動かし方が明確でなかったため当初の混乱を招きました。課題を洗い出し改訂しているところです。

現在はIT技術が進んでいますので、専用のソフトができないものか、ということも考えました。ボランティアの受付は紙ベースでしたが、ほとんどの方はスマートフォンを持っていますから、たとえばフェイスブックにQRコードを載せてはどうか。名前や住所の記入が不要になる。ボランティアとしてできること、所有するライセンスがわかる仕組みにしておけばマッチングもしやすい。あらかじめボランティア保険に加入できるようにしておけば、現場での手続が不要……となれば、受付の待ち時間はなくなります。また、災害現場ではケガ人も出ますが、どこでなにをしてどんなケガをしたか、それはボランティア保険適応か、などのデータ集計をしたり、リーダーが書く報告書も紙からデータに集約したりできれば……と思います。

そうして省力化ができれば、もっと必要なところに人材をつぎ込め、より良い支援につながるのではないかと思います。

長野市から委託されて令和元年12月19日にスタートしたのが、長野市生活支援・地域ささえあいセンターです。職員や元職員、元民生委員等が相談員として被災地への訪問活動を行い、被災者が抱えるいろいろな不安や悩みを聞き、課題を共有して、なんらかの道筋を立てたり、福祉制度の窓口になったり、必要があれば別の制度につなげたりしています。今はコロナの影響で減っていますが、定期的に集まるサロンも開いています。仮設住宅などで孤立して心身に不調が出る方も少なくありません。すぐに解決できない問題も多いのは確かですが、ていねいにお話を聞いていきます。開設期間は未定ですが、仮設住宅などがなくならない限りセンターを続ける必要があるだろうと思っています。

interview

交流の場で、訪問活動で、被災者の気持ちを汲み取り暮らしを支援

リーダー　春原圭太さん（賛育会）

介護福祉士をしていますが、職場（社会福祉法人賛育会豊野事業所）が被災して仕事ができなくなったため、ボランティアセンターに通うようになり、NPOと一緒に炊き出し支援などを始めました。もちろん温かい食べ物も大切ですが、被災者が集まれる場所も必要だと感じ、NPOやNGO、県・市社協、地元のボランティアチームなど13団体が協働して令和元年12月12日に「まちの縁側ぬくぬく亭」を立ち上げました。誰でも気軽に来て、話せて、飲んだり食べたりできて、情報や物資を提供できる交流の場です。

なんとしても関連死、孤独死、自死を防ぎたいという思いでしたが、最初のうちは泣いている方も多く、なんて声を掛けていいかわかりませんでした。ようやく笑いながら話ができるようになって、本当に少しずつですが気持ちが前に進んでいるのだと思います。被災して離れてしまったお隣同士がここで再会して「半年ぶりに会えたね」「元気でよかった」と抱き合っていた姿がとても印象的で、やっぱりコミュニティは大切だと感じました。

ぬくぬく亭の運営のほかに、炊き出し、配食、泥出しやごみの撤去などのボランティア、さまざまなイベントなど、ノウハウを持ったいろいろな団体と連携しながら災害に関する取組をしてきました。特に大切にしているのが訪問活動です。以前から賛育会では自宅訪問を行っていましたが、被災してつらい思いをされている方に寄り添ってお話を聞き、気持ちを汲み取り、不安を少しでもなくせるように訪問を続けました。

被災直後は2階で在宅避難している方に「寒いですね。お茶を飲みに来て温まってください。何かお手伝いできることはありませんか」と声をかけ、年明け後の令和2年1月からは公費解体かリフォームか家を離れるのかを確認。3月からは、それらの進捗確認と、健康・精神状態への配慮が中心になり、住まいの復旧が進んで以降は自宅に戻ってからの状態をうかがう……というように時間の経過とともに変化するニーズの把握に努めました。

豊野は、地区全体が被災したわけではなく、被災に対する意識の差、温度差があります。リフォームを終えて自宅に戻っても、水への恐怖が消えない、雨が降り出すと動悸がする、という方もいて、何が復興かなんて簡単には言えません。

僕ら賛育会の職員15名が出向というかたちでぬくぬく亭を運営してきましたが、発災から1年が経ち、病院の再開に合わせて職員は減っています。僕らが抜けた後の中心は住民自治協議会になる予定ですが、職場に復帰してからも、線は細くなるけれど長く支援していくつもりです。

「ぬくぬく亭」でのお茶飲みや会話がストレス発散に。コロナの影響で利用者は減ったが1か月に700名が訪れたことも

interview

ライフライン復旧のため協会員が一丸となって土砂の除去に注力

副会長　湯本宜成さん（現会長）

長野市建設業協会は、長野市内で建設に関わる約70社で構成され、大規模災害時には長野市から復旧の協力要請を受ける協定を結んでいます。

台風19号の際も千曲川の堤防が決壊してすぐに長野市から連絡があり、令和元年10月13日に災害対策本部を立ち上げました。当時、副会長だった私は他の役員と本部に詰め、緊急時出動組織の9地区の班長を招集し、被害の大きな地区へ資機材や人員をどのように集中させるかなどの打ち合わせを行いました。

協会には土木委員会と建築委員会がありますが、まずは土木委員会が緊急性の高い道路を1日でも早く通行できるよう土砂や水の除去を開始。24時間交代で動いた現場もあります。道路や水路の後は畑の堆積土の除去に移りましたが、被害が広範だったので作業は翌春まで続きました。

建築委員会は、住宅が被災された方のための窓口を設け、住宅の解体や復旧の相談に当たりました。

発災直後は、被災現地の状況も確認できないまま「とにかく向かってくれ」という要請が来たり、要請案件がかなり多岐にわたっていたり、行政側も経験したことのない非常事態に混乱していたようです。情報の確認や整理に苦労しましたが、協会員は「一刻も早く」という使命感を持ち、状況がどんどん変化する中でも臨機応変に動いてくれました。発災後1週間は、長野県建設業協会からの応援もあって1日100人以上が現場へ。その姿には感謝しかありませんし、改めて協会員の結束力を感じました。

とはいえ、反省点もあります。今回は全県からの応援部隊に重機などの資機材を持参してもらいましたが、地元業者がそれらを使えずに時間のロスが生じることもありました。各地区の建設業協会・対策本部で必要な機材をリースできるよう手当てしておけば、もっと迅速に無駄なく動くことができると思いますので、体制の整備が必要です。

業界の高齢化が進んでいることを考えると、もしも同じような規模の災害が発生した時に今回と同じような対応ができるのだろうか、という不安もあります。公共工事が減少して経営環境が厳しさを増す中、業界全体の体力の衰え、人材不足についても真剣に考えていかなければいけません。

なにより、「長野は大丈夫だろう」と災害ボケしていたことを反省していますし、改めて自然の力のすごさ、恐ろしさを感じました。

あれから1年以上が過ぎ、災害から復旧はしましたが、復興はまだまだ途中です。被害が大きかった地域に住民の皆さんが戻られるまで、様々なかたちで住宅再建や復興住宅の推進などに努めたいと思っています。

長野県・市の建設業協会が夜を徹して道路の排土作業に当たった
（写真提供:新建新聞社）

interview

発災から50日間、組織力を活かし、救助・復興を支援

松本駐屯地　第13普通科連隊 本部管理中隊長 1等陸尉　青山隆志さん

令和元年10月12日午前7時頃に強い勢力で伊豆半島に上陸した台風19号は、長野県内においても千曲川の堤防が決壊するなど、甚大な被害をもたらしました。

同日8時、第13普通科連隊は気象情報から災害派遣を予期、第1種非常勤務態勢（一部の指揮所要員による勤務）に移行し情報収集活動を実施、16時には第3種非常勤務態勢（全隊員の勤務）に移行して長野市への災害派遣準備を推進しました。

旅団管内の部隊等により増強された第13普通科連隊は、21時34分、長野県知事から「令和元年台風19号に伴う人命救助活動等」に関する災害派遣要請を受け、それを同時刻に受理、その後、部隊を被災地へ派遣して、4時22分には長野市における人命救助活動を開始しました。

私についても、第3対処隊長として10月13日9時に駐屯地を出発し、部隊を指揮して被害のあった豊野に前進しました。

災害廃棄物の撤去（赤沼公園）

被災地に到着後、先に派遣していた部隊の誘導の下、時同じくして現地に到着していた警察、消防及び消防団の指揮官等と被害状況等の情報を共有し、速やかに要救助者の捜索に入りましたが、現場は辺り一面水没していたため、同じ松本駐屯地に所在する第306施設隊の支援を受け、渡河ボートを使用し被災地域の家屋をくまなく捜索して人命救助活動に任じました。その日の夜遅くまでかかり担当地域のすべての家屋を捜索、逃げ遅れている住民はいないことを確認し、その日の任務を終えました。

10月14日は、第4対処隊である104名が、浸水した豊野病院に入院中であった高齢患者を転院させるため、担架又は自衛隊車両を使って輸送しました。要救助者を搬送する際、担架に併せ、病院にあったシーツを利用して円滑に搬送を実施しました。

10月15日は、千曲川の氾濫により甚大な浸水被害のあった赤沼（長沼地区）において、連絡が取れていない住民の捜索を、第306施設隊を含む連隊主力（245名）をもって朝7時から日没近くまで実施しました。この際、心肺停止状態の住民を1名発見し、警察に引き渡しました。

自衛隊として長野県内で合計436人の人命救助を実施しました。

10月16日からは復旧・生活支援に移行し、応急復旧支援として災害廃棄物撤去、道路啓開等を、生活支援として給食支援、入浴支援等を実施しました。

野外浴場で入浴支援

給食支援で汁物を調理

復旧支援として災害廃棄物の撤去では、長野市、須坂市、佐久穂町及び川上村において合計7t、ダンプ約3,086台分を撤去・搬送し、道路啓開においては、長野県内で総距離約4,000mを啓開しました。

生活支援として給食支援では、第13普通科連隊（松本）、第2普通科連隊（新潟県高田市）、第48普通科連隊（群馬県榛東村）、第16普通科連隊（長崎県大村市）が主体となり、長野市において45,856食（汁物）を提供。入浴支援では、長野運動公園、南長野運動公園、豊野りんごの湯及び北部スポーツ・レクリエーションパークにおいて、東部方面後方支援隊及び第1後方支援連隊及が主体となり長野市、佐久穂町等において、合計延べ13,322人の入浴を支援しました。

また、自衛隊としてのその他の活動として、物資輸送、瓦礫（がれき）等除去、防疫支援、河川の護岸工事等も実施しました。

以上、派遣当時の活動内容等について述べましたが、私が当時被災地に到着した際には、浸水した被災地の状況を見て東日本大震災での記憶がよみがえり、何とも言えない感情が沸き上がったことを覚えています。自分の家が浸水被害に遭っているのにもかかわらず、すでに復興に向け歩き出そうとしている住民の皆さんの姿を拝見し、人間の強さを感じました。

また、我々自衛隊のほかにも、警察、消防、国土交通省や厚生労働省などの機関が連携した救助・復旧活動に、この国の災害対処能力の強さを改めて実感しました。

今後も関係各機関との連携を強化し、「いざ」という時に備え、日々訓練に邁進していきたいと思います。

渡河ボートでの救助活動

interview

床上240cmの浸水被害、移動交番車、仮庁舎を経て1年後に交番を再開

豊野町交番　所長　加部登志彦さん

令和元年10月13日はいつもより早く自宅を出て、朝6時前には交番に着きました。その時はなんの異変もなかったのですが、6時半には休憩室前の通路に水が溜まり始め、みるみるうちに水が増えて6時50分に交番を出ようとした時は自動ドアが開かず、車庫側の開き戸からようやく脱出しました。

パトカーで豊野駅南口に行くと、避難した住民の皆さんが大勢集まっていて、家に取り残されている方がいるとわかりました。歩いて救出できる状態ではなかったので、皆さんに協力してもらいながら中尾水防倉庫から2台のボートを持ち出し、なんとか救助を続けていると、本署や機動隊、消防隊が到着。野尻湖のカヌーの大会を取りやめて駆けつけてくれた方もいました。翌日からは、被災地のパトロールや災害の処理に忙殺される日々でした。長野県内各地の警察署からの応援、他県警の派遣などの協力を得て、水没して動かない車の対応や、災害派遣医療チームが患者を搬送するための交通整理、避難所での身元・安否確認等を続けました。防犯面では、自動車警ら隊等の応援があったこと、期限付きで防犯カメラを設置したことなどが有効だったと思います。損壊した家を離れた住民が多く、「夜は暗くて怖い」という声があったので、防犯指導員や支所の方と一緒に拍子木をカチカチ鳴らして「戸締まり用心」の声掛けも行いました。

浸水した交番で業務はできませんので、しばらく飯綱町交番に居候することになり、11月1日から豊野町交番の駐車場に移動交番車を置いて相談員が常駐する窓口としました。長野県内の被災地で移動交番車を使用するのは初めてのことでした。

いつまでも居候というわけにはいかず、12月25日に仮庁舎を開設しました。かつてケアセンターだった町内の建物をお借りできたのも、地元区長や商工会の方に助けていただいたからこそ。本当にありがたかったですね。

改修工事を終えた豊野町交番は、令和2年10月1日に再開。被災から1年後の10月13日が開所式でした。

仮庁舎を出る時にご近所回りをしたら「もう行っちゃうんですか」と言われ、元の場所の皆さんには「ようやく戻ってくれた」と言われ……。交番は、住民に安心してもらえる場所なんだ、できるだけ街頭に立って警察官の姿を見せることが大事なんだ、とつくづく感じました。

町内ではまだ住宅再建が続いていて住民の皆さんは大変だと思いますが、だからこそいろいろなイベントを企画したり、長野市や区の企画にもできるだけ顔を出したりして、警察を身近な存在だと感じてもらい、安心してもらえるように接していきたいと思っています。

住民と協力してボートを持ち出し、救助活動を続けた

interview

中南信の消防隊が集結し、発災直後の長野へ救助に急行

松本広域消防局　麻績消防署長　上原康二さん

令和元年東日本台風で松本地域でも川の水位がかなり上昇しましたが、東北信では強い雨が降り続き、国土交通省の河川情報で千曲川の氾濫を知ると、我々は中南信の消防本部に連絡をして応援体制を取る準備を始めました。

令和元年10月13日朝のニュースで長野市街地に水が流れ込む様子を見て間もなく、6時25分に長野市消防局から消防相互応援協定に基づく応援要請が来ました。台風被害は特に東北信地区に集中していたことから、長野県内14の消防本部のうち、中信から松本、北アルプス、木曽、南信から諏訪、上伊那、飯田の出動可能な計6つの消防本部が長野県消防相互応援隊を構成し、午前10時、26隊92名の第一次隊が筑北パーキングエリアに集結後、長野市に向かいました。

私は、前進合同調整本部で長野市消防局の指示のもと、指揮隊として長野県隊の救助活動の指揮支援を執りました。最初の任務は特別養護老人ホーム「りんごの郷」と豊野駅南側の住宅街での救出活動でした。

りんごの郷の周りは水深約1.5m。ゴムボートに入居者を収容し、隊員は水に浸かりながら避難場所へ搬送しました。他県から応援に来た航空隊も救助活動を行っていたので、ヘリが巻き上げる風でボートが流されないように立木などにしがみつきながらの活動となりましたが、16名を無事救出しました。住宅街では声掛けをしながら要救助者を探し、2階や屋根で救助を待つ95名を安全な場所へ救出しました。

その後は濡れたままボートなどの資機材を車に積み込み、南信部隊は119番通報の対応に、中信部隊は豊野病院の患者の救助に向かいました。中信隊が豊野病院に着いたのは19時、あたりは真っ暗で、ひざ下まで水に浸かる中を病院医師の指示のもと、絶対安静の患者3名をボートに乗せ転院先に搬送しました。その後も救助は続き、宿営地のホワイトリングに到着したのは深夜0時を過ぎていました。

2日目以降は1日毎に部隊が入れ替わり活動を継続。10月13日は豊野病院の残り32名の患者の搬送をDMAT（災害派遣の医療チーム）と連携して行い、14日以降は活動の内容が行方不明者等の捜索活動に移り、自衛隊によって死亡者が発見されたこともあって、胴付き長靴を装着してゾンデ棒で泥地での捜索活動が16日の午前中まで続きました。

長野県消防相互援助隊は、通常は長野市消防局が代表を務めているのですが、今回は長野市が被災されたため、我々が初めて代表代行として動く必要がありました。そんな中で、長野市消防局は土地勘のない私たちを現場に案内したり、活動指示を的確に行うなど受入態勢が素晴らしく、その真摯な姿に心から敬服しました。

長野市を去る日、これから復興に向かわれる皆さんを残していくのは本当に心苦しく切なく感じました。皆さんが一日も早く元の生活に戻られることを切に願っています。

interview

ドローンでの撮影動画が、被災者を笑顔に

新潟市消防局　大隊長　江部崇さん

令和元年10月13日15時45分、上信越自動車道妙高サービスエリアに、新潟県下の部隊で構成される48隊171名が集結し、消防車、救助工作車、特殊車両を連ねて、長野に向かいました。

雨の影響で高速道路が通行止めだったため、山道を通らざるを得ず、活動拠点の豊野に到着したのは17時。もう辺りは暗くなりかけていました。

現地は建物1階部分が水没した状態で、間もなく救命ボートによって救出された要救助者の救急搬送に従事しました。その他、急を要する出動要請はなく、関係機関との協議の結果から、新潟県大隊は一旦、宿営地の長野県消防学校へ向かい、活動指示を待つことになりました。その後、長野市消防局から夜間の119番通報対応を依頼され、東部文化ホールに移動。3班でローテーションを組んで待機しましたが、救助要請はなく、落ち着いた感じで時間が過ぎていきました。

10月14日は、豊野病院の患者90名の転院先への搬送と、穂保と大町で15件の119番通報に基づいて救助活動を行いました。この日はすでに水は引き、泥かきを始めている人もいて、皆さんの無事が確認され安堵しました。それでも念のため、約400世帯を一軒一軒声掛けして回り、逃げ遅れている人がいないか確認もしました。

意外だったのは、新潟県大隊の活動エリアにおいて瓦礫やごみが非常に少なかったことです。過去、新潟県三条市の水害では、瓦礫が活動の支障になり非常に苦労しただけに、背丈ほどもあった水がたった一日で引いて、10月14日午前中にはほぼ救助活動を終えたことに、正直戸惑いすら覚えました。

この災害派遣では、総務省消防庁広報担当と連携してドローンによる被災情報の収集も行いました。後にその映像は避難所に提供され、水が引いた住宅地の様子を見て、安心された避難者の方が多かったと聞いています。本来ならば、ドローンは救助活動に役立てるためのツールですが、それ以外にもこんな活用の道があることに気付かされたのは大きな収穫でした。

長野市は水害経験が少なく、困っている人が多いだろうと思い、夜も休む暇なく活動しなければと覚悟して出動したのですが、結果的に救助要請が少なかったのは不幸中の幸いでした。

また、長野市消防局の皆さんが、しっかりと受援態勢を整えてくださったことにも非常に感銘を受けました。私たちもこの度の経験を参考に、今後の災害時の受援に備えたいと考えています。

水が引いていく被災地を見る新潟県大隊、水が引く速さは信濃川下流域の新潟とは違うと驚かされる

土地勘のない被災地の活動では、長野市消防局の的確な指示が役立った

interview

14時25分離陸、1時間で7名を救出

福井県防災航空隊　副隊長　西村光平さん

令和元年10月13日、令和元年東日本台風による増水により千曲川堤防が決壊、氾濫を受けて水災害状況を消防庁が把握し、緊急消防援助隊の応援が必要と判断した長野県に対して消防庁から出動要請を受けました。

同日午前中には出動準備を完了し、隊員6名とパイロット、整備士が飛行前ブリーフィング完了していたのですが、飛行経路の天候が悪く離陸できたのは14時25分。15時18分に松本空港に着き、ヘリベースである長野県防災航空事務所で救出エリア・要救助者引渡し場所などを確認した後、赤沼及び津野地区に向けて出発しました。

現地は氾濫した水でまったく道が見えない状態でしたが、空は明るく、水の流れも落ち着いて見えたため、思いのほか落ち着いて全体を見ることができました。とはいっても、屋根等に避難した人の災害救助は経験がなく、救出中は非常に緊張が走りました。幸いだったのが、この地域の多くの住宅は下屋が広い造りであったため隊員を降下させるポイントが安易で助かりました。

我々のほかにも名古屋市、静岡市等の消防防災航空隊や海保・自衛隊からの災害航空隊のヘリコプターが無線で連絡を取り合いながら、要救助者を捜索、救助活動を行っていました。我々の機体は、川崎BK117C-2といいまして、迅速な救助活動ができる半面、一度の救助活動で機体に多くの救助者を乗せられるほどのパワーがないため、数名救助しては地上隊に渡すという作業を繰り返しながら、1時間ほどで7名救出。要救助者は高齢の方がほとんどでしたが、水の勢いも収まっていたので、救出したヘリの中では焦った様子もなく、安心したのを覚えています。

この日は16時50分に最後の2人を救助したところで活動するための燃料が少なくなったため、17時16分に松本空港に帰投。明日以降も活動するつもりでしたが、悪天候予報だったため一旦福井空港に戻り出動待機となりました。結局天候回復の見込みが立たず、活動任務は10月13日だけで終了しました。

今回の災害活動を振り返ると、普段から厳しい自隊訓練で様々な状況を想定して要救助者救出する訓練を行っていたため、屋根からの救助は落ち着いて活動できました。最近は総二階建て（ズボ建ち）の家屋も多いので、このような水災害時は2階以上の窓から助けを求める人が増加すると思われます。そういう状況下で迅速かつ確実に救助できるように救助方法も数パターン考えて訓練しておく必要があると実感しました。

災害時は早めの避難が命を守る上で何よりも大切ですが、氾濫など予期せぬ事態が発生し自宅で救助を待つ際に、自分の位置を救助ヘリコプターから発見されやすいようなハンディライトを準備しておくと便利だと思います。捜索する際に上空から見やすいのはライト等の光や日中であれば鏡など反射する光を照らしていただくのも有効な手段となります。

最後に今後も安全運航かつ迅速な救助活動を心掛け、福井県防災航空隊員一同確実な災害対応が行えるよう日々鍛錬を重ね任務を遂行していきます。

interview

住民たちの危機意識を薄めさせてしまった過去の経験

長沼分団　副分団長　高見澤昇さん

令和元年10月10日頃からかつてない大型台風が日本に近づいているというので、勤務先の青果市場では、関係する産地に被害が出ないか、インターネットで天気予報を見ていました。国交省のサイトで、屋島グラウンドを10月11日に閉鎖という記事を見つけ、千曲川河川敷に水が上がってくる可能性があることを知り、非常に危機感を持ちました。

10月12日は家で待機していましたが、午後になって長沼支所に対策本部が設置され、16時に分団長や部長は長沼分団詰所に集まりました。その段階で立ヶ花の水位は4.3m。その後水位は1時間に1mずつ過去に経験がない急激な上昇を見せ、危険水位に達するのは10月13日深夜1時頃になると予想されました。

17時、気象庁から警戒警報レベル3が出て、消防団は積載車で注意喚起の広報活動を行いました。21時には、水位がだいぶ上がったため、分団役員・対策本部員も各自避難することになり、対策本部も解散しました。

私はいったん自宅に戻り、母が避難時に赤沼公会堂に置いた車を取りに22時半頃外に出ました。すると、1階に灯りがついている家があって、まだ逃げていない人が大勢いるようでした。

飯島分団長と連絡を取り合いながら対策を検討しました。大町と穂保は、連絡網で各住民にその知らせが届きましたが、赤沼は防災無線と積載車での避難指示だけだったので、各家庭に判断が任されることになりました。

23時頃、千曲川を見に行くと、水は尋常でない増え方をしていて、日付が変わって0時24分には、立ヶ花の水位が9.9mに到達。津野から大町地区ではあとわずかで越水する水位になりました。柳原分署長の判断で、住民は自宅二階への垂直避難をし、消防団も自身の安全確保を優先するよう通達が来ました。

危険な状況を感じた飯島分団長から積載車で赤沼の住民に最終避難広報をしてくれと頼まれ、私は直ちに詰所に駆けつけ、積載車を車庫から出そうとしました。

その時、今まで聞いたことのないような「ゴー」という音が聞こえてきました。風かなと思ったら、千曲川の水の音でした。

ほどなく0時54分に「午前1時立ヶ花越水、午前2時穂保で決壊のおそれ」というメールが来て、そのメールを読み上げながら、「至急避難してください。避難場所は北部スポーツ・レクリエーションパークです」と、最大ボリュームで呼びかけました。

赤沼の巡回が終わると、越水した水が道まで来たため、急いでUターンして柳原分署へ向かいました。柳原分署で河川事務所のモニター映像を見ていると、3時過ぎに水が土手を越え、時間とともに水の流れが速くなってきました。その間、河川敷を見に行った人が帰ってこないという通報が分署に入り、消防隊が出動したり、車で逃げまどう人で道路が大混乱になるなど大変な騒ぎになりました。消防隊も分団も署内に戻って体制を立て直そうという話になったその時、どーんという音

被害が大きかった津野・穂保付近

決壊した場所に近い長沼体育館

災害ごみが集積した赤沼公園

とともに堤防が切れました。

母と私は無事でしたが、赤沼にあった家は被災しました。10月16日に我が家に行ってみると、床上1m20cmのところに浸水の痕跡がありました。もともと地盤が弱かったうえに、戦前の建造だったので、家は大きく傾いてしまい、改築を余儀なくされました。前年に亡くなった父の位牌を2階に上げておいたことがせめてもの救いでした。

10月15日になって、赤沼で2名の死者が出たことが確認されました。一人は自宅の外で、もう一人は自宅の中で亡くなっていました。

住民の多くが決壊はしないだろうと思っていました。昭和50年代に決壊の危機がいくつかありましたが、越水はしても堤防が切れることはなかったからです。今回も切れるはずはないと、垂直避難した人たちがヘリコプターやボートで救出されました。危機意識が薄かったことが、今回のような死者を出すような事態を招いたと私は思います。

後になって、平成28年に完成した桜堤の桜の木は、川が増水したとき引き抜いて放り投げて、水流の勢いを弱めるために植えられていたものだったことを知りました。昔の人は、ここが洪水の危険性の高い地域であることをよく知っていたのでしょう。もし、私たちがそういう経緯を知っていれば、もっと多くの人が逃げ遅れずに済んだと思います。

最後に赤沼を積載車で避難を呼びかけた時、回れなかった通りがありました。もう少しあそこで止まって何回も呼びかけをすればよかったかなという悔しさはあります。

その一方で、隣で運転している部下の命は絶対守るという思いもありました。何かあったら「逃げろ」と言おうと、そのことが頭の中をぐるぐる回っていました。

東日本大震災の時に、水門を閉めに行った団員が亡くなったという話が非常に印象深くて、団員の命と住民の命――その二つのせめぎ合いの中で、あの時自分は一体どうすればよかったのか、その思いが今も常に頭のどこかにあります。

災害から1年以上が経ち、河川防災ステーションが新設されて消防団の詰所もそこにできる予定です。また、復興対策委員会や専門家とともに、長沼の新しい防災対策を組み立てる活動も始まっています。

私は、秋が来たら畑にりんごの苗を植えようと思っています。10年後、真っ赤な実をつける頃には、長沼がしっかりとした防災対策のもとで、安心して暮らせるまちに生まれ変わっていることを心から願っています。

interview

被災地で奮闘の保健師 被災者に寄り添い 生活再建の実現へ

愛知県春日井市役所　保健師　加藤健剛さん

災害対応の派遣職員として長野市役所に来たのは令和元年東日本台風の2か月後でした。

春日井市役所では保健師として介護保険分野の事業を担当していましたが、連日のように流れる災害の映像や被災者のニュースを見て派遣職員に志願しました。募集人材とのマッチング、春日井市役所内の選考会を経て派遣が決定し、長野市住宅課で応急仮設住宅の管理を担当しています。

実は平成30年の西日本豪雨の際にも岡山県倉敷市真備町に出向き、仮設住宅や在宅避難の方の心身の健康相談に対応した経験がありました。でも、約4,000世帯が被災した長野市は混沌としていて最初は戸惑いましたし、何かしらのサービスを選択して災害を乗り越えるビジョンをお持ちの方もいた一方で、避難所で途方に暮れたままの方もいて、再建の速度差を感じました。

応急仮設住宅の担当として、まずは、ご自身で再建方法を考えるのが難しい方、何らサービスを利用せず孤立している方を優先にアプローチするため、土日も夜も関係なく訪問を続けました。1階が全壊して壁がない家、トイレや風呂が壊れた寒い家で在宅避難している方も多かったです。

市が社協に運営を委託する「長野市生活支援・地域ささえあいセンター」主催の被災者サロンにも携わった。被災者の孤立防止、見守り支援、生活相談なども行っている

仮住まい先にはいくつか選択肢がありますが、それぞれに一長一短ありますので、しっかり話を聞いて、家族構成、年齢、職場までの距離といった情報やニーズを把握し、ベストを探っていきました。被災世帯ごとの生活再建プランが決まるまでには何回も足を運ぶことになりますが、仮住まいではあっても安心して眠れる場所を提供できるという達成感がありました。

訪問の第一目標は住まいの確保ですが、被災者の悩みはそれだけではありません。様々な状況を想定し、例えば保育園やデイサービスの困りごとにも対応できるよう主管以外の課の情報も仕入れ、1回の訪問で多くの必要な情報を届け、行政を頼ってもらえるよう接してきました。

泥のかき出しやりんご畑の掃除など、仕事がない週末はボランティアにも行きました。行政職員ではなくボランティアの一人として被災者の方が本音を話してくださったこともありましたし、ボランティアさんからの情報提供がきっかけで支援につながったケースもありました。ボランティアさんは熱くて情報力も高い方が多かったように思います。

これほどの災害ですから、前を向くのは簡単ではありません。最初は怒りをぶつけられることもありましたが、徐々に名前と顔を覚えてもらい、良い関係が築けるようになったと思います。

「復興祈念事業」の一環としてボランティアやご支援いただいた皆さんへの感謝の気持ちを込めた復興ボックスをドライブスルー形式で販売した

生活必需品の不足、公費解体の相談など担当以外の相談にも応じられるよう準備をし、何度も被災者に説明を続けた

例えば治療が必要でも心療内科への偏見がある方。病院は若い人を優先してほしいから自分は我慢するという高齢者。男は弱音を吐くべきじゃない、という男性。つらい思いを抱える方に対してできるのはささいなことですが、泣ける場所を確保したり、気持ちを整理するための日記を勧めたり、一緒に病院を探したり、「俺は男なので聞かせてください」とじっくり話を聞いたり。本音をぶつけていい存在であることを伝え、寄り添うことを心がけてきたつもりです。

当初、派遣期間は4か月の予定でしたが、令和3年3月まで1年間の延長を志願しました。

災害から1年の間に5割の方が住まいの再建を果たされましたが、数年間にわたる支援が必要な方もいます。それぞれに理由があるので、一つずつ聞き取り、なんとか背中を押して10年後、20年後を考えられるようになってほしい。先の見えない方の相談を受けておきながら、「人事異動で帰りますので何かあれば後任に」と言えるのか。自分が被災者だったら、気持ちを言えなくなるのではないか。担当交代で被災者の負担が大きくなってしまうのではないか。後任がゼロから関係性を築くのは大変ではないか。そんなことを考え、また自分が災害復興に十分に寄与したとは思えないこともあって1年間の派遣期間の延長を申し出ました。

先の見通しが立っていない方は大勢います。仮設住宅の入居期限は2年ですから、それまでに生活再建を確立できるようにしていきたいですし、もしもまた災害が起きたときに被害を少なくするために何をすべきなのか、調査をもとに分析を進めていきたいとも考えています。

特に、災害対応を通じて、災害前の防災計画では定めていなかったものの、被災者に必要なサービスがあり、業務の改善点を学ぶことができました。災害に備え準備すべきことや、万が一大規模災害が発生しても実効性とスピード感あるワンストップの行政サービスを提供できるようになれば……と考えます。それは日本中の行政機関の課題でもあると思います。

春日井市には、2日間で約20万人が訪れる「春日井まつり」があります。そこに復興ブースを作り、被災者のりんごを売って復興資金に充て、継続的に災害のことを考えてほしい、と企画していたのですが、コロナ禍でまつりは中止になってしまいました。私の勝手な思いではありますが、早くコロナが収束し、春日井市でイベント開催できたらいいなと思っています。

最後に、復興への道のりは長いですが、地元住民に愛される長野市だからこそ、必ず災害を乗り越え復興を果たせると信じています。一日も早い復興を祈念しています。

派遣期間の延長で長野市に1年以上滞在。「長野市の人は温かい方が多いという印象。りんごもおいしいです」